

Title	近世資本主義起源考続論 (五、完)
Sub Title	
Author	阿部, 秀助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.12 (1922. 12) ,p.1660(26)- 1665(31)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19221201-0026">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19221201-0026</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 近世資本主義起源考續論 (五完)

阿部 秀助

## 五

所謂資本主義的經濟組織の成立に關する問題は一面資本其者を敵視する中世的經濟組織の基礎に於て如何にして大資本が構成せられしやの點に存すると共に、他の一面に於ては所謂自給自主主義が最も重要な活動を演せし經濟組織の内部に於て如何にして無限の營利的努力たる資本主義的精神が發生せしやの問題である。今前者に對する一要素として吾人は茲に獨逸の織物工業に就きて考察して見たいと思ふ。

十九世紀の中期に至る迄、獨逸工業上、最も重要な意義を有せしものは織物工業殊に麻布の製造業である、何故に麻布の生産が他の織物工業である絹織物業及毛織物業に比して大なりしかは絹織物が其生産上に於て歐洲の西部及南部地方

に限定せられ毛織物業が主として都市其の者以外は存在せざりしに對して麻布の製造業は都市と地方とを不問、殆んど何等の制限を受けなかつた點である、殊に十四世紀の中期以來、綿、麻交織物を見るに至つたことは益、此業をして發達せしむるに至つたのである、而して獨逸の輸出向麻布の最も古き生産地はポーデン湖畔の地方である、既にレックス、サリカの時代に於て此の湖畔には亞麻及大麻の産出を見し結果、之を原料とせし織物工業の發達を來たし、西曆十三世紀より十五世紀の中期に至る迄、麻布生産及取引の中心點はコンスタンツ市であつたのである、確かに當時の國際的取引に於てポーデン湖畔は極めて好地位を占めたもので、各地方に對する商業上の最も重要な衝路にあつたのである、即ちレヴント方面の貨物はヴェニス、ラレダックよりポーデン湖畔を経てライン方面に、次ぎにマイラント及ゼノア方面より獨逸に齎らされしものも此地方を通過したのである、更に西部方面に對するもので最も取引の盛んであつたのはポーデン湖畔からシャハッセン及バーゼルを経て佛蘭西方面に對するものであつたのである、而して十五世紀の中期以後にあつてはコンスタンツの麻布製造及取引上に於ける地位は一

面サン、ガレンの方面に移ると共に更に他の一面に於ては、オーバー、シュワペン地方の都市即ちラベンスブルグ、メミンゲン、カーフポレン、ワンゲン、イスニー等に轉じ殊にラベンスブルグの如きは十五世紀の初期以來西班牙の市場を獲得するに至つたのである。

次にウルム及アウグスブルグの兩市にあつても製麻事業は既に早くより發達し、殊に之れが最も盛大を極めた時期は綿麻交織物の産出を見るに至つた時である。此兩市は中世の獨逸に於ける綿織物工業の中心として世界的名聲を博し、資本主義的運動上に非常なる影響を及ぼしたのである。其後、ブッガーの如き富豪が此綿麻交織物の製造家、取引者の間より輩出せしことは如何に當時に於ける織物業が資本集積上重要な意義を有せしかを認めしむるものである。

## 六

近世資本主義の典型であるブッガー家の確實な史料に見へたのはウグスブルグの租税帳の千三百六十七年の部にブッガー(Fucker)とあるに始まるのである。而してウエルザー、ヘルワルト、ランゲンマンテルの如き土着の富豪にあらざるブッ

ガーが果して何れの地方よりアウグスブルグに移住し來つたかに就きては何等確實なる證左なきも、同家に傳ふる家譜によれば、略ぼ其由來を知るを得るのである。即ちアウグスブルグの近郊レヒフェルトを去る北西二軒のグラベン村にハンス、ブッガーなるものが農業を營む傍、機業及染物業に従事せしが、其一子で父と同名のハンス、ブッガーは千三百六十七年を以て草深き田舎を出で、アウグスブルグを以て自己の活動の新舞臺、新郷土となし、茲に同市に於けるブッガー家なるもの基礎を築くに至つたのである。然し彼れが地方からアウグスブルグに轉せし動機は勿論、明白ではないが彼れが其家業の當時にあつて有望なることを認識せし點にあると思ふ。當時のアウグスブルグはさながら一種の革命的暗流に襲はれしもので市民對手工業者の間に於ける軋轢は日を逐ふて甚しく、而して之れが主なる原因は課税問題で、即ち同市に於て勢力を有せし市民は市其者の必要とする費用を主として間接税によつて支辨せんとせしに對して、手工業者は之を直接的財産税又は所得税に求めんことを要求したのである。殊に後者の中で最も甚しき反對者は機屋、パン屋、靴工、鍛工等である。斯くの如く都市其者の動搖はブッガーの如

き外來者が其勢力を扶殖するに好個の機會で、此機會に乗じて自己の地位を占めんとしたハンス、フガイは先づ一個の外來者としてハインリッヒクロイツ街に借家し之れが家業たりし機業以外に絲類其の他織物の原料を商ふこと約一、二歳にして早くも彼れの機敏なる商才は市民の認むる處となり、遂に同市の市長の娘クララ、ウヰドルフと結婚し、千三百七十年を以て此外來よりの移住者はアウグスブルグの市民権を獲得するに至つたのである、其後彼れの事業が益盛大となりし結果、千三百七十八年新たに自己の店を構へたのであるが、尙ほ之れが狹隘を感せし結果、遂に千三百九十七年同市に於て最も目抜の場所であるマキシミアン街に轉するに至つたのである、而して彼れの業務が益盛大となるにつれて彼れ自からも亦た當時アウグスブルグに於ける最も有力なる機業組合の代表者として市政に參與し茲に子孫繁榮の餘地を造るに至つたのである、千四百九年に彼が逝きし際に約三千フロリンの遺産を有せしことであるが、此資産を分析して考ふれば彼が其郷里クラベンより齎らせしものもあると思ふが、然かも彼れをして當時最も多くの利益を得しめたものは棉麻交織物の生産者として取引者としての活

動にあつたのである、即ちウルム、ニュルンベルグ方面に自家の製品の販路を擴張せしが如き之れが主要なる原因である、而して當時に於ける織物工業が資本集積の主要なる基礎たりしことを他に證明するものは僅か十年にして身は何等の資産を有せざる一移住者の地位よりニュルンベルグ第一の富豪否な恐らく當時の獨逸に於ける第一の大商人たるに至りしバルトロメウス、ビアチスである、彼れは千五百三十八年ヴェニスに於て荷造を家業とするもの、家に生れ、千五百五十年ニュルンベルグに轉すると共に約十年間は同市の商店に於て活動し、殊にプレスウ商店にありし間に彼れは獨逸東部の事情及シュレジア方面に於ける麻織物取引の方法を解するに至り、其後、ニュルンベルグの名門の未亡人と結婚することによつて多少の資本を得、之れによりてヴェニス方面より齎らされし香料、皮革、駝鳥の羽毛等の取引を事とせしと、共に殊に獨逸方面の麻織物販賣に向つて畢竟の力を注ぎしが、彼れが千六百二十四年八十七歳を以て世を去りし際には百二十四萬フロリンの産を遺したのである、以て當時に於ける織物工業殊に之れが取引が資本構成上主要なる意義を有せしことを知るを得るのである。(完)